



湖 東 焼

湖東焼は、江戸時代後期に彦根城下で焼かれた焼物です。城下の商人絹屋半兵衛たちにより始められ、井伊直亮・直弼・直憲の3藩主の代に彦根藩の御用窯として栄えました。

この間、白く堅く焼き締まった磁器を中心に、染付・金襷手・赤絵・青磁などの細やかで美しい焼物を世に送り出しました。ここでは、まず湖東焼の歴史をふり返ることから始めましょう。

湖東焼の歴史

絹屋半兵衛は、城下の内船町に店を構える古着商でした。古着商は現在ではすたれましたが、かつては主力的な商品で、半兵衛も相当の資力をもった商人だったようです。彼は古着の仕入れを京都でおこなっていました。仕入れの道中、京焼を垣間見る機会も多かったに違いありません。当時、京焼は茶花道宗家や文人の好みを背景に陶器生産を堅持する一方で、新しく伊万里や瀬戸などの技術的援用を受けて磁器生産を指向し始めていました。

文化12年(1829)、半兵衛は、京都に来ていた伊万里の職人をともなって帰り、彦根城下の商人2人を誘って共同出資の形で、磁器を焼く窯を興すことにしました。仲間となった2人は、同じく古着商を営む油屋町の平助と御蔵手代の澤町の宇兵衛です。彼らは町奉行に願い出て、城下町の西方にある芹川左岸の晒山に窯を築き、細工場を建てました。初窯は失敗でした。そして翌年、2度目の窯はなんとか成功し、藩主に献上できるまでになりました。ところが、仲間3人のうち平助がはやくもこの事業からおり、窯場も佐和山山麓の餅木谷に移すこととなります。ここでの初

窯は成功しました。ただ経営は相変わらず苦しく、宇兵衛も去り、天保2年(1831)からは半兵衛が単独で困難な事業をすすめることとなります。

絹屋窯は13年続きました。この間、半兵衛はもとより、伊万里のちに瀬戸などからも招聘された職人の努力の甲斐あって、染付や赤絵など相当の良品を産することができるようになりました。個人経営で一刻も早い成功をみるには、技術を自己開発するより職人を招いて窯を運営させたほうがよい。その意味で半兵衛の狙いは効を奏したといえます。しかし、半兵衛にはもう1つの大きな課題がありました。それは販路の開拓です。半兵衛は苦心のあげく、製品を大坂の瀬戸物問屋に卸し、地場の茶碗屋にも売ったようです。ただ、伊万里と瀬戸が量産体制をとって制している市場に、一介の商人が食い込む困難は計り知れないものがあつたことでしょう。半兵衛は13年間に2回、最初は天保5年(1834)に銀5貫目、2度目は天保12年(1841)に銀15貫目を、それぞれ彦根藩の国産方から借用しています。天保12年の借用時、先の銀5貫目はいまだ完全に返済していませんでした。いかに殖産興業のための貸し付けとはいえ、優遇の域を越えています。この時点で彦根藩には将来この窯を藩直営にしようとする思惑が既に生まれていたようです。

そして天保13年(1842)、絹屋窯は御用窯として彦根藩に召し上げられ、藩の直営となります。藩主は12代の井伊直亮です。直亮は雅楽器収集に代表されるように、美術品をこよなく愛好する人物でした。彼のもとで、湖東

焼は洗練された高級品生産にますます拍車がかけられることになりました。瀬戸・九谷・京都の各窯から多くの職人が招かれ、窯や関連施設が大幅に増改築されました。そして、直亮が期待した優秀な作品が、しだいに市中にも出まわるようになります。しかし、世はすでに平穩泰平とは言い難く、直亮は湖東焼にさほど本腰を入れないまま、相州沿岸警備そうしゅうなど東奔西走の渦中でこの世を去ってしまいます。

直亮の後を受けて、直弼が13代藩主となりました。嘉永3年(1850)のことです。直弼は不遇な部屋住みとして「埋木舎」うれぎのや生活を送る頃から、楽焼らくやきを介し焼物に強い興味をいただいていた。彼は藩主となるや直ちに、従来5間の窯を7間に拡張し、職人の獲得と養成に力を注ぎました。職人の招聘は、最盛期には数十人に及んだといえます。成型のための細工師さいくし、素地に絵をかく絵付師えつけし、それぞれの良工が各地から扶持をつけて雇い込まれました。一方、藩内からも将来を見込んで子供を招き、良工の下に配して人材の養成に努めました。こうした技術陣営を背景に、高級品生産という湖東焼当初来の目的は定着し、湖東焼の名はしだいに世の知るところとなりました。この頃から藩窯の製品は「湖東」の2字に統一され、他の銘文を入れることが禁じ

られるようになりました。刻印も二重枠に楷書で「湖東」と刻ませました。

湖東焼の経営上、残すところは、その製品の販売体制です。絹屋窯の弱点も実はここにありました。絹屋半兵衛が藩の直営とすることに同意した本意は、量産体制をとって市場を独占している伊万里と瀬戸に、一介の商人が食い込もうとする困難を藩に託したのでしょう。彦根藩ではこれを受けて高級品生産を明確に打ち出し、量産体制の結果、日用品が主流となっている伊万里や瀬戸に介入することを試みました。湖東焼は、京都・大坂の藩の売捌所うりばきしょで御用商人を通して販売され、ある程度の成果を得ていたようです。ただ、頻繁な設備投資のために、財政はあいかわらず苦しいものでした。嘉永5年から約2年間、藩内の豪商藤野四郎兵衛に経営を委託した際も、さすがの豪商をもってしても金千両余の損失を出して経営を辞退しています。経費を食う藩窯を廃止するか存続するかといった論議が、普請奉行ふしんぎぎょうを中心に行われたのも、この頃のことです。

安政2年(1855)、藩窯の大改革が始まりました。この大改革は、藩窯に対する消極論をほとんど意に介さない拡大計画でした。窯場の規模は一挙に2倍となり、それに見合うように職制も拡充しました。ここに湖東焼は黄金時代を迎えたのです。高級品生産という目標は変わっていません。この時代に多くの逸品が焼成され、湖東焼の名はゆるぎないものとなりました。

ところで藩窯期には、藩のお抱え職人以外にも、湖東焼に携わる人々が現れました。その一群の人々は客分待遇の絵付師えつけしです。幸齋こうさいと鳴鳳めいほうがよく知られています。幸齋は、直亮の時代に彦根に来て仕事



金襴手柳翡翠図建水 鳴鳳作

をし、直弼の時代になってほどなく京都に去った人物です。飛驒高山の僧が還俗して、絵を京都で学んだと伝えます。鳴鳳は、京都の寺侍でしたが、妻子と鸞英という弟を伴い彦根に来て、数年ののち伊勢に去ったといえます。直弼時代初め頃のことです。井伊家に残る湖東焼の多くが鳴鳳の作品で占められています。在藩期間が短いことを考慮すると、彼が彦根で制作した多くが井伊家に納められていることとなります。井伊家とりわけ直弼と鳴鳳のただならぬ関係に興味もたれます。

他の一群の人々は、安政3年(1856)株仲間を結成して、主に藩窯の素地を用い自宅で上絵付をした絵付師達です。城下白壁町の賢友、犬上郡高宮村の赤水、坂田郡原村の床山、坂田郡鳥居本村の自然齋の4人です。賢友がお抱え職人であった以外は、3人とも中山道沿いに自宅を構え、旅人を相手に土産物としても売り出していました。中でも自然齋の作品は多数現存しています。ここで述べた人々は、藩のお抱え職人として描いていないため、自分の銘を器の要所に記すことができました。

かくして軌道に乗りかけたかにみえた湖東焼ですが、黄金時代の幕切れは突然やってきました。万延元年(1860)3月3日、直弼が桜田門外で花と散るに及び、彦根そして窯場は騒然となりました。湖東焼はパトロンを失い、そのうえ藩が苦境に立たされたのです。こうなると職人の動きは早いものです。またたく間に約半数が彦根を出奔してしまいました。それでも、かろうじて残った職人により、約2年の間、窯の火はともし続けました。まるで直弼の死を弔うかのように。しかし、つぎつぎと去る職人にはいかんともし難く、文久2年(1862)、幼君直憲のもとで、藩窯は21年の歴史を閉じました。その後は、窯場の設備・器具・材料など一切の払い下げを受けた山口喜平らにより、再び民窯として明治28年まで細々と存続します。しかし、製品からは、かつての湖東焼の面影はしだいに薄れて



金襴手羅漢雲鶴文茶碗 幸齋作

いきました。技術も客筋も、当初のままでは有り得なかったのです。

湖東焼の窯場跡

このように、湖東焼は絹屋窯の初年のみ芹川左岸の晒山に窯が築されましたが、その後は藩窯期を経て山口窯に至るまで、一貫として佐和山麓の餅木谷で焼かれました。現在この餅木谷の窯は比較的良好な状態で残っており、平成2年度には、滋賀県の指定文化財となりました。一方、窯場を描いた当時の絵図も伝存していました。絵図の名称は「御陶器場所地面并諸御建前御絵図」。安政2年(1855)に彦根藩普請方が作成したものです。この年は、藩主直弼の下で窯場が大幅に改革され、規模の拡大が計られて黄金時代の幕開けとなった年でした。この絵図も、そうした大改革の様子を記録したものである。次頁の図を参考にしながら、窯場の作業工程に即して少し詳しく見ておくことにしましょう。

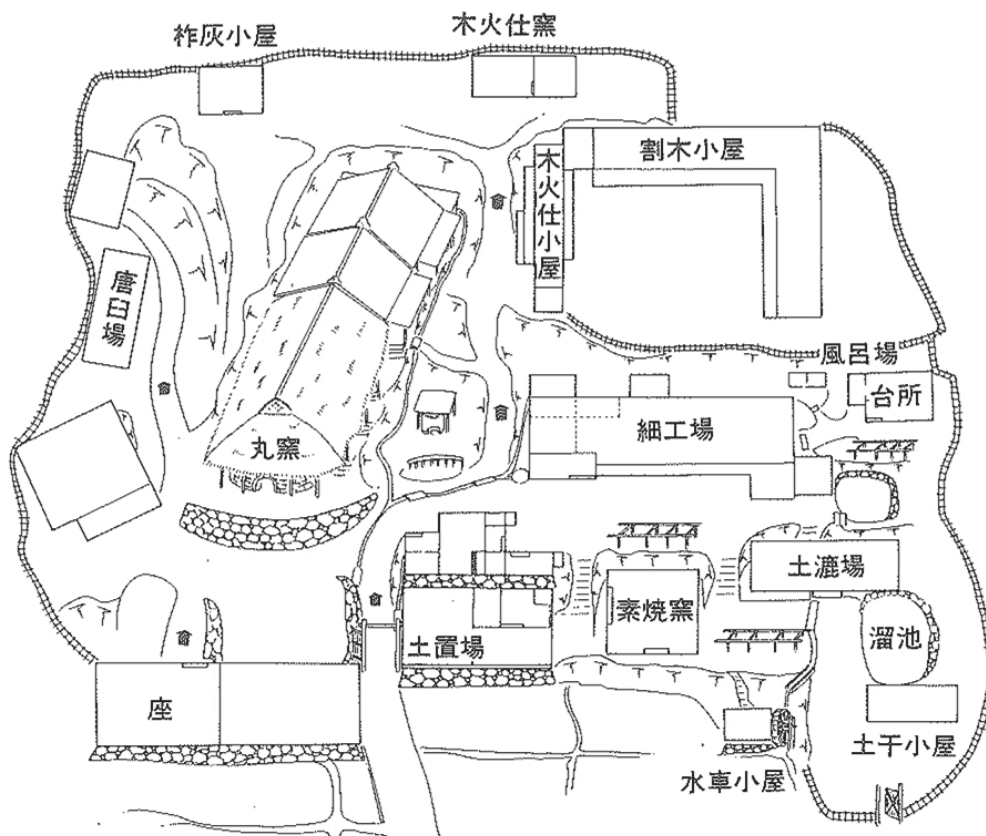
窯場には、陶器の素地となる陶土や磁器の素地となる磁石が、俵詰めなどで送られてきます。これを臼で挽き、ふるいにかけて粉末とし、さらに微粉にするために水で漉す作業がまず行われます。運び込まれた陶土や磁石は、一度土置場あたりに降ろされた後、唐臼場や水車小屋の臼で挽かれ、土漉場で微粉に

されました。土漉場の上下にある溜池は水簸の際に用いる水を確保したものでしょう。こうして得た素地を用いて作品の形成が行われます。成形には、袋物師・型物師・彫物師などが分業で事にあたりました。細工場は彼らの作業場でしょう。成形が終わると乾燥に移されます。乾燥は屋内のほか屋外乾燥が行われ、細工場の前庭などに描かれた棚風の施設がそれに供されたものと思われます。乾燥後、作品は一度素焼きされます。素焼窯がそうでしょう。そして本格的な絵付けに入ります。湖東焼は、さまざまな釉薬と技法を用いて絵付けを行いました。それらの基本となるのが透明釉の施釉。透明釉は長石粉と柞木の灰を混ぜ合わせて作ります。柞灰は薩摩産のものが著明ですが、たいへん高価であり彦根藩内でも育成されたといひます。この柞灰を保管する専用の小屋が柞灰小屋です。

いよいよ丸窯を用いて本焼きがなされます。

丸窯は、山麓の斜面に階段を造成して構築された連房式登窯。焚口と煙出の間の各房に作品と割木が詰められ、焚口から火を入ると連続する各房が煙道となり、上方へしだいに熱がまわり、やがて発火して作品が焼成されます。絵図では丸窯の下方の屋根が藁葺、上方が板葺に表現されています。焼成に用いる割木は樹脂に富む松割木が使用されましたが、その松を燃焼し易いように乾燥させるのが木火仕です。木火仕小屋や割木小屋などはその関連の建物です。木火仕窯があるところから、割木は強制乾燥もされていたようです。これで窯場の一応の作業工程は完了しますが、こうした工程とは別に、表門を入ってすぐの建物に記された座などの部屋は、窯場を管理運営する役人などが詰めていた所と予想され、また台所や風呂場なども準備されていたようです。

(谷口 徹氏 提供)



安政2年湖東焼窯場(絵図をもとに作図)